

「教育と愛国」の映画と講演会
の集いに143名が参加!

実行委員の一員より

6月11日、八幡市立生涯学習センターにて、齊加尚代監督による『教育と愛国』の上映と同監督による講演会が開催されました。当市は、小雨模様の天候ながら、八幡市内はもとより京都府下、枚方市などから参加者が多数つめかけました。

アンケートに応じて頂いた方の感想を何点かご紹介します。

「今の教育現場の状況がわかつた。タモリさんが『新しい戦前』と言つたことが思い出された。」

「もと教育現場にいた教員ですが、政治が教育の内容に口だしすることには違和感を持つていました。気になっていた違和感をとても整理してもらいました。」「この映画をつくられた齊加さんに敬意。また、企画された4団体にお礼します。」「よく構成され、保守側の人間の意見ものせ、説得力がありました。政治家の質の劣化がよく伝わりました。」「物事を冷静に考え、自分の考えをもつことのできる力を観てほしいです。」「戦争は歴史の真実を学ぶのは当たり前です。もっとたくさん的人にこの映画を観てほしいです。」「戦争は教室内から始まる、記者は戦争を始めることができます、ともに、名言だと思つ。」「戦争は絶対NO! 政治家を見張つていきたい。」

22世紀八幡ルネッサンス運動
の源流と言ひうるもの

—武部誠君死去30年に寄せて—

伊藤錚治

1993年7月7日、当時、男山中学校の2年生だった武部誠君は、八幡軸の民家（廃屋）の離れの鴨居で、首吊り状態で発見された。建物は1週間も経たないうちに解体された。それから30年が経つている。私は当時、中学生を持つ親で、あの時の不穏な状況を鮮明に覚えている。強い関心を持ちながら、浮足立った人々の姿勢に唖然とし、なんとかしなければと痛感した。

ささやかに協力者を集めて市民団体をつくり、会議を持ち、署名を集めた。校長や教育委員会と話し合いもした。男山中学校の校区の隅々まで足を運び、署名を集めた。多くの人の声を聞いた。

みな荒れる男山中学校をなんとかしたいという想いではあつたけれど、表立った協力はできないと。いう人は極めて多く、市民の中には私の身辺について危惧する声も少なくなかった。

署名の数は1万名を超えて、教育委員会に持つて行った。一方、市の同和対策室は、会の発行している市民ニュースに「差別の可能性がある」とし、私は武部さんと一緒に呼ばれた。前後して部落解放の指摘を受けた。武部問題に寄せ

てくれた意見は40名を超えたが、そのすべてをニュースに記載したことに対し、そのうちの1件に差別の可能性があるということであると載せた編集者の姿勢に問題があるということだった。意見をそのまま載せることが大事だとし始めた私の見解に対し、市や六区支部は「内容に問題がある」とした。この件では、亡くなつた当時の大野府会議員が「差別ではない」と述べていることを、人を介して知つた。部落解放同盟の当時の有力者は私を八幡中央病院に呼んで、「あんた、えらいね」と讃めた。市議会でもこの問題は取り上げられた。教育委員会の担当者が「抗議文」を持って家まで来て私に渡した。市議会議員一人ひとりに、この問題に対する見解を求めたが、意見を寄せた2人の議員のうち、ある議員は「各会派は申し合わせて出さないよう求めている」と話した。実際、それ以外の議員からはなんの返答もなかつた。個人からの文句や抗議を受けたことはなかつた。公的な団体と市民感情の乖離はあまりにも大きかつた。

誠君の死については、保護者の方々が警察に押しかけ真相を明かすように求めたが、自死の説明に尽きた。武部さんは誠君について「自殺するような子ではない」と再三繰り返している。

署名活動の中では、現場周辺は特に口が重く、張り詰めた空気が支配し、ただならぬ状況を呈していた。当時の男山中学校の男子生徒は親の問い合わせに対し、「かん口令が敷かれていた」と話している。実際、物言えぬ雰囲気が漂つていて、相当のかん口令が敷かれていたようだ。

武部事件が発生してから、市内の他の中学校に転校したり、引っ越したりしたケースのほか、市外の私学へ転校した者、八幡をあきらめて市外に引っ越して行つたなどの頭著な例も出た。武部事件は全国新聞でも取り上げられ、記者が苦情を寄せた人の家に若い記者が呼ばれ、たまたま私もそれを目撃している。この事件をめぐつては様々な動きが生まれた。

30年経つた今は、もっとも大切なことは当事者が真相を明らかにすることである。力なくとも、自然な対応あるいは疑問に対し、関係者は最低でも答える義務を負つていて。この事件で私は、少しでも八幡を良くしていこうという強い想いが生まれた。そして、ひとつでもやれることはないと始めたのがゴミ拾いだった。それは、22世紀八幡ルネッサンス運動の原点ないしは源流と言ひうるものである。

伊藤様、毎日、ルネッサンス運動をご苦労様です。三十年前、男山中学校の武部誠が亡くなつて、

今思えば警察学校の先生たち、学校の先生たちと会っているのですが、その時は、誠は死体となつていたと思います。私も前の晩いろいろと搜しました。宇治川の誠が釣りに行つていた川も、夜に見に行きました。警察で誠と対面した時の冷たさは、今でも忘れられません。早や三十年、あの子の仏さんに今でもジュークと花は欠かしたことはありません。今も三十年前も変わりありません。教育委員会の方、学校の先生は自分のことしか考えていません。八十歳まで生きて、当時、なぜ八幡に行って、なぜ日本石油の社員寮の管理人になったのかわかりません。

今、誠が生きていれば、どんな生活をしているかと思うとわかりません。八幡の同和地区の家で首を吊っていたそうですが、学校の先生方だけひとりとして捜してくれませんでした。警察で死体の傍にいたのは、若い警察官だけでした。

いろいろ思い出しても、三十年という時間がかかつっています。昔の日本石油の寮のあとにマンショングが建つていて、随分と変わっていることでしょう。誠は帰つてくることはありません。年が経つているので、思い出すものが経つていいません。

伊藤さんもルネッサンス運動をがんばってください。

武部輝雄